

この本の効果的な使い方

この『演習問題集 国語』は、『予習シリーズ』の各回の〈文章読解〉の単元に合わせてつくられた「文章読解問題集」です。〈文章読解〉が得意で、もっと問題を解くことによって〈読む力〉を高めたという生徒を、あるいは逆に、〈文章読解〉が不得意で、練習量・学習量を増やすことによって〈読む力〉を補強したいという生徒を対象につくられています。

文章、および問題のレベルは、『予習シリーズ』とほぼ同じレベルですから、『予習シリーズ』の学習を終えて、無理なく取り組みます。

効果的な学習方法は、基本的には『予習シリーズ』とかわりませんが、〈文章読解〉が不得意な場合と得意な場合に分けてアドバイスをしておきます。

◎ 〈文章読解〉が不得意な場合の学習方法

文章内容の正確な理解が成立していれば、ほとんどの問いに答えられるはずですが、一字一字、一語一語、一文一文の正確な理解から、文章全体の正確な理解への道が始まることを忘れずに、〈精読〉型学習を進めてください。

1 『予習シリーズ』・学習課題の解説を再読する 各回の学習課題の解説には、文章の〈読み方〉の基本が説明されています。〈読み方〉の手順や注意の配り方などの基本ルールを確認しておきましょう。

2 文章を最低三回音読する 音読によって、読めない漢字や熟語、意味のわからない語句や表現などを発見し、まず、字面で〈読める〉へわかる状態をつくりまします。

3 文章内容の正確な理解を成立させる 辞書・事典を調べたり、身近な大人に質問したりして、語句の意味から文章内容まで、可能な限り正確な理解を成立させます。

4 問いに答えることで理解を確認する 〈問い〉に対する〈答え〉そのもの、あるいは〈答え〉を導くためのヒントは、すべて文章中にあります。問われた内容に対応する部分なり表現なりが、文章中のどこに書かれているかを発見することが、文章読解問題を解く基本作業です。

5 くわしい『解答と解説』を読んで理解を深める ×だった問題を大事にしましょう。解説をヒントに読み直し、考え直し、解き直す——自分の弱点克服の出発点がここににあります。「急がば回れ」——一つの文章を可能な限り正確に深く理解しようとする〈精読〉型学習を通じて〈ことばの力〉を育てることが、確かな読解力・思考力・表現力を結実するものと考えます。

◎ 〈文章読解〉が得意な場合の学習方法

〈文章読解〉の学習の基本は、不得意な生徒の場合と同じですが、1・2は省略し、辞書を片手に3・4を同時に進め、二十分〜三十分程度で集中して問題を解く〈演習〉型学習をしたらうえて、じゅうぶん時間をとって5の検討作業、解き直しをします。結果に応じて、1・2・3段階の点検をするようにしよう。

目次

第1回	文を読む・ことばのきまり	4
第2回	文のつながり	7
第3回	文の役割・話題と要点	10
第4回	段落関係と要旨	13
第5回	総合	16
第6回	場面と情景	19
第7回	人物の気持ちと性格(1)	22
第8回	人物の気持ちと性格(2)	25
第9回	物語・小説の主題	28
第10回	総合	31
第11回	意見と根拠・理由(1)	34
第12回	意見と根拠・理由(2)	37
第13回	経験と感想(1)	40
第14回	経験と感想(2)	43
第15回	総合	46
第16回	表現を読む	49
第17回	詩を読む(1)	52
第18回	詩を読む(2)	55
第19回	総合	58
解答と解説		61



1 次の詩を讀んで、後の問いに答えなさい。

水泳ぎ

草野 心平

1 背泳ぎしながら

14 二つの雲がかたまつて

2 あつい光をうけながら

15 二つの雲がいつしよになつて

3 入道雲をながめるのは

16 もくもく もくもく

4 気持ちがいいな

17 大きくなつて

5 もくもく もくもく

18 背泳ぎしながら

6 青天井のまんなか

19 くじらのように

7 つぎから つぎと

20 水をふきあげるの

8 もりあがつて

21 気持ちがいいな

9 光とかげの ゆらゆらする

10 青い まつ青い水にうかんで

11 入道雲をながめるのは

12 気持ちがいいな

13 まっ白

問一 次の各行は、意味のつながりのうえで、どの行に続きますか。

それぞれ行の番号で答えなさい。ただし、そこで切れていて、どの行にも続かない場合には、×で答えなさい。

- ① 1行め
- ② 5行め
- ③ 6行め
- ④ 8行め
- ⑤ 9行め
- ⑥ 12行め
- ⑦ 17行め
- ⑧ 18行め

問二 線①～⑤は、それぞれ何(だれ)が、①「うけながら」、②

「もりあがつて」、③「ゆらゆらする」、④「大きくなつて」、⑤

「ふきあげる」のですか。次から適切なものを選び、それぞれ記

号で答えなさい。同じ記号を何度使ってもかまいません。

ア 背泳ぎ イ あつい光 ウ 入道雲(雲)

エ 青天井 オ 光とかげ カ 水

キ くじら ク ぼく(作者)

問三 ①4行め「気持ちがいいな」、②14行め「二つの雲がかたまつて」、

③15行め「二つの雲がいつしよになつて」の各行の中に、主語と

述語の関係で結びついた文節がありますが、それらは次のどの型

と同じですか。それぞれあてはまるものを選び、記号で答えなさい。

イ。同じ記号を何度使ってもかまいません。

ア 何がーどうする イ 何がーどんなだ

ウ 何がーなんだ

問四 線「くじらのように」(19行め)とありますが、この表現は、

実際には、何(だれ)が、何をしながら、どうすることを、何(だ

れ)が、どうすることにたとえているのですか。わかりやすく説

明しなさい。

問五 この詩を、各行の係り受けや主語に気をつけて、五つの部分に

分け、第二、第三、第四、第五の部分の、それぞれはじめての行を

番号で答えなさい。

② 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

根雪と いう ことばが ある。 毎日のように 雪が ふり、 け
て しまわない うちに、 新しく ふった 雪が 上へ上へと 積も
って いく。 ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

日本で 根雪が 見られるのは 北海道と 本州の 日本海側で、
太平洋側には あまり 見られない。 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

雪国では、十一月も 半ばに になると、秋晴れの 日が めつき
り へり、どんよりと くもった 肌寒い 日が 続く。 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

問一 線①～⑫の各文節は、A 主語、B 述語、C 修飾語、
D 接続語、E 独立語、のいずれにあてはまりますか。 それぞ
れ、A～Eの記号で答えなさい。

問二 ①～⑬は、A 主語・述語の関係、B 修飾・被修飾の関係、C 対等(並立)の関係、D 補助・被補助の関係、のいずれにあてはまりますか。 それぞれ、A～Dの記号で答えなさい。

問三 線①「毎日のように」、②「むかしから」、③「この」の各文節は、意味のつながりのうえで、どの言葉に結びついていますか。 それぞれ一文節でぬき出して答えなさい。

問四 線①「見られない」の、意味のうえで、主語を一文節で答えなさい。

問五 線②「秋田県の魚沼地方などで ある」とありますが、これらの地名は、何の例としてあげられているのですか。 わかりやすく説明しなさい。

問六 線③「考えて きた」のは、何(だれ)ですか。 六字の言葉で文章中からぬき出して答えなさい。

問七 次のA～Cの各文は、二つの意味にとれるあいまいな文になっています。 これらの文について、後の問いに答えなさい。

A わたしのようにハンドルの力を入れすぎないようにしてペダルをふみなさい。
B どろまみれになってにげる桃太郎を金太郎はおいかけた。

C 三人の子どもをもつ女性に意見を聞く。

問一 Aの文は、「わたし」が、力を入れすぎているのか、力を入れないのか、あいまいですが、「力を入れすぎている」ということがはっきりわかるようにするには、どこに読点(、)を打つたらよいですか。読点を打つ位置の直前の四字をぬき出して答えなさい。

問二 Bの文は、「どろまみれになって」いるのが桃太郎なのか、金太郎なのかあいまいですが、「どろまみれになって」いるのが金太郎であることがはっきりわかるようにするには、言葉の順序をどう変えたらよいですか。次からよいものすべてを選び、記号で答えなさい。

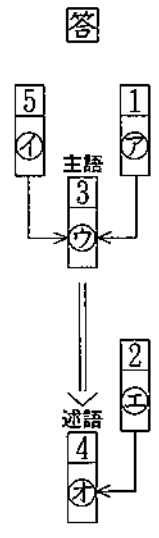
- ア 金太郎はどろまみれになってにげる桃太郎をおいかけた。
- イ 金太郎はにげる桃太郎をどろまみれになっておいかけた。
- ウ にげる桃太郎を金太郎はどろまみれになっておいかけた。
- エ にげる桃太郎をどろまみれになって金太郎はおいかけた。

問三 Cの文は、どのようにあいまいなのですか。次の解答文の [1] [2] にあてはまる十字程度の言葉を考え、解答文を完成させなさい。

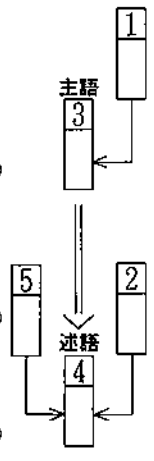
「三人の子どもをもつ女性」という言い方が、[1] という意味なのか、[2] という意味なのか、あいまいである。

[4] 例にならって、①②③の各文の組み立てを示す図を完成させなさい。

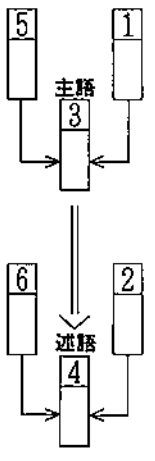
例 ひまわりの ① 大きな ② 花が ③ みごとに ④ 咲きました。



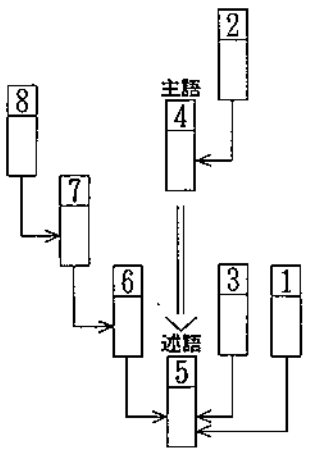
① 白い ② 雲が ③ 青空を ④ ゆうゆうと ⑤ 流れていく。



② 窓からは ① 春の ② あたたかい ③ 日ざしが ④ 明るく ⑤ さしこんでいた。



③ ⑦ 五年生の 私は、 ⑧ 毎週、 ⑨ 私立中学に ⑩ 合格するのを ⑪ 目指して ⑫ 日曜テストを ⑬ 受けている。



解答用紙 33	解答解説 23	第19回 総合 補充問題 2 20 補充問題 1 18	第15回 総合 補充問題 2 15 補充問題 1 13	第10回 総合 補充問題 2 10 補充問題 1 7	第5回 総合 補充問題 2 5 補充問題 1 2
---------------------	---------------------	---	---	--	--

第5回 総合 補充問題 1

◆ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。①～⑨は形式段落の番号を示します。

- ① 「大きな赤いリンゴ」という表現をきくと、人は「大きい」も「赤い」もひとしくリンゴというものの性質を形容していると思うのが普通である。(1) この二つの形容詞の構造が非常に違っていることは次のような実験をしてみれば①すぐ明らかになる。
- ② ある人が、かりにリンゴという果物を知らなかったとしよう。その人の前に、いくつかの、種類のちがった果物を並べて、その中に赤いリンゴを一つ入れておく。話を簡単にするために、他の果物は赤くないものばかり選んでおくことにしよう。さてこの人に向かって、「このいくつかの果物の中に赤いリンゴがあります。どれですか」ときけば、その人はためらうことなく、②正しい果物を指すことができる。
- ③ 次に、「ではこのリンゴは大きいですか、それとも小さいですか」とたずねたらどうだろうか。今までリンゴとはどんな果物かを知らなかったその人は、初めて見るリンゴを前にして、③大きいか小さいかを言うことはできないにちがいない。
- ④ この実験から言えることは、「赤い」という形容詞の意味を知っている人は、目の前に現れた事物が「赤い」か「赤くない」かは、その事物についての、更に詳しい知識や情報がなくても、直ちに判断することができるのに、④ある対象を「大きい」と言うことができるためには、実はその対象について、もっと多くのことを知っていなければならぬということである。
- ⑤ ところがこの同じ人が、今度は象を見たことがなかったとしよう。動物園に連れて行かれて、これが象だと教えられた時に、彼は恐らく、「わあ大きいな」とか「なんて大きいんだ」と言って驚くだろう。彼は象を今まで見たことがなかったのである。それなのに、初めて見た象に「大きい」という形容詞を使えるのだ。そのくせ、初めて見たリンゴについて、「大きいか小さいか」ときかれて答えられなかったのである。⑤これは一体どういふことなのであろうか。
- ⑥ よく考えてみると、「大きなリンゴ」と私たちが普通言う場合には、(リンゴとして)大きい方というように、リンゴという特定の事物の枠の中の大小を問題にすることが多い。言い換えると普通の平均的なリンゴとは、どのくらいの大きさのものを経験から知っていて、その知識と照らし合わせながら目の前のリンゴについて、大小を判断するのである。(2) ⑥初めてリンゴを見た人は、その大小については判断のしようがないのだ。
- ⑦ ところが象の場合はどうだったのだろうか。これも初めて見たというのに、このときは「大きな象を見てきたよ」と家に帰って話してもおかしくない。実は象の場合には、彼は今まで自分が見聞したいろいろな他の動物と比べて、目の前にいる動物が、とても大きいということを言っていることと解釈できる。(3) 「(象として)大きい」のではなくて「(動物として)大きい」というような意味で「大きな象」と言ったと考えられる。
- ⑧ 「大きい」という形容詞のリンゴと象についての二つの異なった使い方から分かったことは、何かあるものを「大きい」と言えるためには、私たちは何かしらの規準を必要とするということである。ある規準に照らした場合にだけ、あるものが大きいか小さいか判断できるといふ意味で、このような形容詞を言語学では⑧相対的な形容詞と呼んでいる。
- ⑨ これに対し「赤い」のような形容詞は、⑨絶対的な形容詞の例なのである。日本語では、どのような色を「赤い」と呼ぶのかということ一度知った人は、目の前にある対象が、初見であろうと既知のものであると、⑨それが赤いか赤くないか即座に判断することができる。郵便ポスト、消防自動車、夕日、日の丸、すべて赤い、とためらうことなく言える。つまり、「赤さ」という性質は、いわば⑨もの(事物、対象)に根ざしている、あるいは錨を下ろしていると言えるのに対し、「長さ」とか「大きさ」のような性質は、⑩もの(事物)の間に存在する性質で、事物それ自体には根を下ろしていない性質なのである。

(鈴木孝夫「ことばと文化」より)

問一 (1) (2) (3) にあてはまる言葉として適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。
ア したがって イ けれども ウ つまり エ たとえば

問二 — 線部①「すぐ明らかにする」とありますが、何が「明らかにする」のですか。文中の言葉を使って、三十字以上三十五字以内で答えなさい。

問三 — 線部②「正しい果物を指すことができる」とありますが、そのようなことができる理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア あらためて説明されなくても、「リンゴ」が赤い果物であることは知っているから。
- イ 実験に使ったさまざまな果物の中で、「リンゴ」だけが他とちがった色をしているから。
- ウ 「リンゴ」という果物は知らなくても、「赤い」という言葉の意味は知っているから。
- エ 他の果物に比べて、「リンゴ」は特に赤い色はつきりとしている果物だから。

問四 — 線部③「大きいか小さいかを言うことはできないにちがいない」とありますが、言うことができない理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 大きいか小さいかの感じ方は人によってちがうものだから。
- イ 一般的なリンゴの大きさがどのくらいなのかを知らないから。
- ウ 他の果物とリンゴとの間に大きさの差がほとんどないから。
- エ 目の前のリンゴの大きさが以前に知っていたものと異なっているから。

問五 — 線部④「ある対象を『大きい』と言うことができるためには、実はその対象について、もっと多くのことを知っていなければならない」について、

- I 「もっと多くのこと」とは、「リンゴ」の場合でいうとどんなことですか。「く」ということ」につながるように文中から二十六字でさがし、はじめと終わりの三字を書きぬいて答えなさい。
- II 筆者は、ある対象を「大きい」と言うためには何が必要だと述べていますか。文中から六字以上十字以内で書きぬいて答えなさい。

問六 — 線部⑤「これ」、⑧「それ」について、

- I ⑤「これ」の指す内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
ア 初めて見る「象」の大小は判断できても、初めて見る「リンゴ」の大小は判断できないこと。
イ 初めて見る「象」に対しても、すぐに驚くほど大きいとわかること。
ウ 「リンゴ」のように身近なものについては、その大小がすぐには判断できないこと。
エ 同じ人であっても、そのときそのときによってものに対する大きさの規準が変わってしまうこと。
- II ⑧「それ」が指しているものを文中から十字以内で書きぬいて答えなさい。

問七 — 線部⑥「相対的な形容詞」、⑦「絶対的な形容詞」とありますが、次の言葉は、それぞれどちらにあたりますか。「相対的な形容詞」なら○、「絶対的な形容詞」なら×で答えなさい。

- 1 広い 2 青い 3 高い 4 丸い 5 長い

問八 — 線部⑨「もの(事物、対象)に根ざしている」、⑩「ものどもの間に存在する」とは、それぞれのどのような意味ですか。次から適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア そのものとは関係なく作られている。
- イ そのもの自体の中にそなわっている。
- ウ すべてのものの中に共通にそなわっている。
- エ 他のものとの比較において判断される。
- オ そのものの中にかくれていて表にあらわれない。
- カ 特定の一つのものとは関係をもたない。

問九 ④、⑦段落は、それぞれどのような働きをしていますか。次から適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 前の段落で述べたことの具体例をあげている。
 イ 前の段落で取り上げた例とは対立する例を新たにあげている。
 ウ 前の二つの段落で取り上げた例についてまとめている。
 エ 前の段落で述べたことについて、その理由を説明している。
 オ 二つ前の段落で述べたことについて、その理由を説明している。
 カ 前の段落までとはちがう新しい話題を示している。

問十 この文章を前半、後半に分けると後半はどこからになりますか。形式段落の番号で答えなさい。

問十一 本文の内容と合っているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「大きい」という形容詞は、自分自身の体験から得た知識だけで判断できる性質を表している。
 イ 我々が形容詞を使ってあるものの性質を表すときには、それまでに見聞した他のものと必ず比較して表現している。
 ウ 以前見たことのないものに対しては、「赤い」という形容詞を使うことはできても、「大きい」という形容詞を使うことはできない。
 エ 「大きい」という形容詞は「赤い」という形容詞とはちがって、他の何かと比べたときに初めて判断できる性質を表している。